



Title	政治と文化の狭間における日中親善：中国文学研究会が主催する周作人歓迎会について
Author(s)	高, 磊
Citation	アジア太平洋論叢. 2023, 25, p. 23-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95100
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

政治と文化の狭間における日中親善
—中国文学研究会が主催する周作人歓迎会について—

**The Japan-China Goodwill Between Politics and Culture:
A Study of the Welcome Party for Zhou Zouren Organized by the Japanese Association
on Chinese Literature**

高 磊*
GAO Lei

Abstract

This article focuses on the welcome party for Zhou Zouren organized by the Japanese Association on Chinese Literature in 1934.

The Chinese writer Zhou Zouren visited Japan in July 1934 for personal reasons, receiving widespread attention from Japanese society. On August 4th, the Japanese Association on Chinese Literature founded by Takeuchi Yoshimi and others, held a welcome party for Zhou Zouren. This welcome party objectively followed the political slogan of “Japan-China Goodwill” promoted by the Government of Japan at that time, although it was not the intention of the members of the association, who were looking forward to the true cultural exchange between Japan and China. At the welcome party, Zhou Zouren talked about the literary circles in China and his position with the Japanese scholars and writers who attended this party. At the same time, Yanagisawa Takeshi, a bureaucrat of the Ministry of Foreign Affairs of Japan, asked for Zhou Zouren to make a concerted effort to achieve the cultural integration of Japan and China. It can be assumed that the interest of Japanese society in Zhou Zouren's visit had political intentions at this time. This welcome party had already hinted at the fate of Zhou Zouren and the members of the association, who would later be drawn into the political whirlpool of the Second Sino-Japanese War.

Keywords: Zhou Zouren, the Japanese Association on Chinese Literature, Japan-China Goodwill

I はじめに

1934年、竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫三人を中心に、日本最初の中国現代文学を研究する組織である中国文学研究会が設立された。竹内らが研究会の設立の準備を始めた1933年は、日本が中国本土侵略を公然化し、中国に日本の満洲支配を黙認させる塘沽停戦協定を結んだ年である。また同時に、日本国内では共産主義運動への弾圧と思想統制が強まり、多くのプロレタリア文学者が治安維持法によって検挙され、集団転向が起こった年でもあった⁽¹⁾。

1934年7月、周作人が来日し、この訪日は周が「日本国内の一般の関心を集めた最初である」⁽²⁾という。日本滞在中、周作人は日華学会、同仁会などの団体に招待され、また朝日新聞、読売新聞、改造社の取材を受けた。8月4日、周作人は徐祖正と共に、中国文学研究会が主催する歓迎会に招待された⁽³⁾。当時まだ無名の青年であった中国文学研究会のメンバーとともに宴に同席したのは、著名作家の佐藤春夫、島崎藤村、中国文学者の塩谷温、竹田復、外務省文化事業部課長の柳沢健など錚々たる面々であった。多くの先行研究⁽⁴⁾はこの周作人歓迎会が、竹内らのグループが世に出る契機となったことを認めている。

この歓迎会の実態について、伊藤徳也は、当時の周作人と竹内の日記を照合し、他の参加者らが残した回想を考察することで、歓迎会を仕掛けたのは評論家の新居格であるが、途中から中国文学研究会が主催する形になったことを指摘した。伊藤はさらに、竹内と武田は当夜の受付係を担当し、参加者は、日本の文人、東京帝大関係者とそれ以外で構成されていたと指摘す

* 大阪大学人文学研究科・博士後期課程

る⁽⁵⁾。

劉岸偉は、1934年の周作人の「妻子の帰省に同行した私的な滞在」は、「各方面の注目を浴び」、中国文学研究会を含む多くの文化団体、メディアが主催する会合に招待された、と指摘している。劉はさらに、当時の日本知識人の周作人観を表した文章として、辛島驍の「周作人氏と現代支那」⁽⁶⁾と松井武男の「中国文壇と周作人」⁽⁷⁾を紹介し、周作人を「国民党、いわば支配的勢力内部の人間」とみなした辛島の文章を「奇抜な憶測」とし、当時左翼の作家に批判されていた周作人の文壇での立場を紹介した松井の文章を「専門家による的確な観察」とみなす⁽⁸⁾。

また訪日中の周作人と医学団体の同仁会との交流を中心に論じた徐曉紅は、日中両国の報道を整理し、「〔同仁会が：引用者注〕来日した周作人に好意を示したのは、彼の同仁会への好感を得るだけでなく、周氏を日中親善同盟に取り込もうとする措置でもあった」⁽⁹⁾と指摘した。徐論文は周作人に対する日本社会の歓迎と当時の日本の対中政策とのつながりを示唆したものである。

では、同時代の中国文学研究を志した中国文学研究会は、不安定な日中関係と日本の文化統制の中で、一体どのように周作人を含む中国知識人との交流を展開していたのか。両国の文学者を共に政治に巻き込む日中戦争の前後、研究会メンバーたちは、どのように周作人の政治・文学への態度を認識し、また周が戦後「漢奸」となり、日中関係の犠牲者になった境遇から、同じ外国文学研究者という身分として何を覚えたのか。本稿は以上を主とする先行研究の成果を踏まえ、中国文学研究会が主催した歓迎会と日本の日中親善の国策との関係、及び歓迎会を機に研究会メンバーたちが抱くに至った周作人に対する認識について検討したい。まず周作人と日本側両方の記録から、周の訪日の私的な性質と日本側の公式な応接とのすれ違いを、日中親善を唱える1930年代初期の日中関係を背景として考察し、そこから周に対する日本社会の歓迎における政治的意図を指摘したい。次に新聞記事や竹内らが残した回想をもとに、周作人歓迎会を含む中国文学研究会の活動と前述の国策との関係について論じる。また、その歓迎会の詳細を探るために、出席者である松井武男の文章から宴会での話題になった「中国学芸界の現状」と周作人の「境地」に接近し、さらに外務省の柳沢健が席上で周作人に伝えたことから政府の思惑を読み取る。そして周作人訪日後、研究会による周作人研究と歓迎会への回想から、この歓迎会が研究会メンバーにもたらした影響を明らかにしたい。

II 周作人訪日と1930年代初期の日中関係

訪日前の1934年1月、周作人は「打油詩」⁽¹⁰⁾二首を作り、社会から離れて趣味の世界に隠遁する意を表した。この「五十自寿詩」は4月、雑誌『人間世』に掲載され、文壇を驚かせた。そして周作人のこの隠者的な振る舞いは左翼の作家たちから痛烈に批判された⁽¹¹⁾。

1934年7月11日、周作人は妻の羽太信子、息子豊一及び甥の豊三と共に出発し、大阪商船長城丸で神戸を経由し、15日に東京に到着した。当初は神田芳千閣旅館に滞在し、後に本郷菊富士ホテルへ移った。18日に徐祖正と共に日華学会を訪問した⁽¹²⁾。

『周作人年譜』によれば、周作人は「妻と帰省するために」日本へ出発したという⁽¹³⁾。周作人自身が残した回想「日本管窺之四」の中では、「三年前の夏、私は東京へ遊びに行」⁽¹⁴⁾った、と述べている。また「島崎藤村先生」では、周作人は、初めて島崎に会ったのは1934年だったと述べ、「夏休みを利用して、妻と共に東京に二か月間滞在し、徐耀晨〔徐祖正：引用者注〕氏もそこにいた」⁽¹⁵⁾と記している。この訪日は周作人の主観では確かに先行研究が指摘する通り「私的な滞在」だと言えるであろう。

一方、日本側の記録を挙げると、「中国文学研究会年譜」によれば、周作人と徐祖正は「昭和十年から北京大学外国語文学系で日本文学を講じた。来日の目的はそのための書籍の購入にあった」⁽¹⁶⁾と記されている。その根拠は、改造社の記者の井上紅梅によるインタビュー「周作人氏に聞く」の、「日本文学講座を受持っているので久振で休暇を利用し教材を集めに来た」⁽¹⁷⁾という言葉だと推測できる。日本側の記録が伝えるものは、周作人の公の場向けの回答だと思われる。

周作人が日本についての翌日、最初に彼を訪問したのは「日華学会の高橋君」と「警視庁外事課の森君」である⁽¹⁸⁾。「高橋君」は日華学会主事の高橋君平だと思われる。日華学会は1918年4月に創設され、中国留学生の教育と支援を行った団体である。1923年から毎年のように外務省文化事業部の対支文化事業⁽¹⁹⁾から国庫補助を得ており、「単なる善意の民間団体ではなく、政府、財界の強い支援を得て働いている団体」であった⁽²⁰⁾。外務省外交史料館データベースに収録された日華学会関係雑件第2巻「昭和九年度第十八回年報」⁽²¹⁾には、徐祖正と周作人の訪日に関する記録がある。

年報の14、16、17、18頁によれば、日華学会は中国からの文化関連の団体・個人の日本視察のための斡旋を業務としたようである。徐祖正は7月9日に来日し、まず日華学会の宿所に泊まり、「視察方面」は同じ日についての北京大学教授「朱光潛」と同様、「学校其他」である（「朱光潛」は当時北京大学外国語文学系主任だった「朱光潜」の誤植だと思われる）。そして「北京大学教授」周作人は15日来日、「視察方面」は「学校知人訪問」と記されている。個人的な来日とはいえ、周作人は北京大学教授として、外務省との関わりを持つ日華学会から応接を受け、「日華文化上の連絡」のための「視察」者として「公的」に取り扱われた。周作人の訪日の主観的意図と日本側の認知とは完全に一致していたとは言えないであろう。

また、以上の資料によれば、この「両三年来」の「日華文化上の連絡」は、「政治の事情」のため「疎隔杜絶」していたが、「本年度初期」以降は和やかに進むようになったという。この背景を探るために、1930年代初期の日中関係を振り返っておきたい。

1931年、満洲事変が勃発し、中国各地の排日運動は激化した。翌年9月、日満議定書が締結され、日本は正式に満洲国を承認した。1933年、外相に就任した広田弘毅は、列強の動向に配慮しながら、諸国との関係改善を目指す「協和外交」を推進した。10月21日の閣議で、広田外相は閣僚に、「帝国指導の下に日満支の提携共助を実現する、反日政策を放棄し排日運動を根絶させる」、「ソ連との衝突をさける」、「アメリカの対日危惧をなくす」などの方針を伝えた⁽²²⁾。

この方針に従い、駐支公使有吉明は日中関係の改善を求め、国民政府の親日派と接触した。日中親善という論調は、中国東北地方の占領を合理化する口実として日本政府に利用され、日本国内のメディアもこの言葉を積極的に用い、国民政府においても肯定的な反応を得たという⁽²³⁾。1933年6月と9月、有吉公使は南京で汪精衛と二回会見し、日中関係改善のための意見を交換し、10月北平に向かい、北平政務整理委員長黄郛と会談した。10月15日の読売新聞朝刊に掲載された社説「有吉公使の北上と日中関係」は、有吉の北平行きを両国関係の「好転しつつあるこの空気を有効に導き、共存共栄の道へ揃って踏み出すには、まことによき機会」と伝えた。1934年4月から6月にかけて、汪、黄と数回の会見を行った後の6月26日に、有吉は南京の蒋介石を訪問し、両国の「親善関係の維持促進を図らねばならぬことを痛感している」という返事を得る⁽²⁴⁾。

以上の流れを見るに、一度「政治の事情」のため途切れた日中文化の連絡は、1934年に親善関係を促進するという両国政府の合意により再開したものであると推測できる。周作人の私的な訪日が日本国内の注目を集め、公式な応接を受けたことも、このような政治的背景の影響から考え得るであろう。

7月22日の朝日新聞朝刊の記事「周作人来る一魯迅の弟、支那の文学者」は、周作人について「日本文学の権威」、「嘗て日本に留学したことのある大の親日家」と評し、「周氏の今回の来日の目的は休暇を利用しての日本文学再研究」と記している。周作人の日本や日本文学への深い理解と親しみを伝える意図が窺える。

このように日本では「日本文学再研究」のために来日した「大の親日家」として歓迎されたわけであるが、周作人自身はこの「親日」という言葉についてどのように考えていたであろうか。

時を遡る1920年に、エッセイ「親日派」で、周作人は以下のように書いている。

中国の親日派は、儒教徒と同様、世間に批判されながらも、本当にその名にふさわしい者

が存在していない。

中国で憎悪され、日本で歓迎されるこの親日派は、本物の親日派ではなく、名利を求める小物にすぎぬ。中国にとっても、日本にとっても有害である⁽²⁵⁾〔訳は引用者による、以下同〕。

1919年のパリ講和会議における、ドイツの山東半島での利権を日本に譲渡するという決定に反発し、中国で五四運動が起こった。反日デモでは、条約調印の拒否、そして親日派官僚と見なされた曹汝霖、章宗祥などの免職が叫ばれたのである。上の文章の「親日派」はこのような社会現状を反映している。本物の親日派について、周作人は以下のように述べている。

我々は一国の栄光はその文化——学術と文学芸術にあり、その属地、利権あるいは武力にあるわけではないと認める。〔中略〕中国に本物の親日派が存在していなかったのは、中国には日本国民の真の栄光を理解する人がまだいないからである⁽²⁶⁾。

1926年8月、周作人は雑誌『語絲』93期に「『親日派』の嫌疑」を発表し、相互の文化を研究して日中両国の理解を促進するという中日教育会の理念への共感を述べた。中日教育会とは、1925年9月、排日運動と教育権回収運動の激化により経営不振に陥った天津・漢口両同文書院の問題を解決するために、両校を東亜同文会の単独運営から日中両国人で構成する組織による共同経営へ改組しようという提案が出され、その提案に応じて設立された組織である⁽²⁷⁾。親日派と言われる可能性を意識して、周作人はそこに前述の「親日派」を再掲し、またその付記「『親日派』の説明」で、「『親日派』とはなんと素晴らしい言葉であろうか。吾輩にはふさわしくないであろう」⁽²⁸⁾と述べている。周作人はつねに「親日派」という呼び方を敬遠し、本物の親日派を、名利を求めず、日本の文化をよく理解する者だと考えていることがここから読み取れる。それは決して政治的な理由によって日本で歓迎されるような「親日派」ではなかったであろう。1934年に来日した周作人が日本側の報道を見たことは確定できないが、日本社会から「親日家」として歓迎されることは、彼が望まない状況であったと推測できる。

Ⅲ 中国文学研究会と日中親善の国策

次に中国文学研究会が主催した周作人歓迎会が、前述した日本の「日中親善」⁽²⁹⁾の国策といかなる関わりを持っていたかについて述べる。

歓迎会が、新居格の計画から中国文学研究会の主催となった経緯は上述した伊藤論文によって明らかにされている。竹内は、武者小路実篤、与謝野寛、長谷川如是閑、佐藤春夫、有島生馬ら五人の有名人を訪ね、発起人に加わってもらうことを頼んだが、承諾したのは与謝野、佐藤、有島の三人のみであった。佐藤は竹内の頼みを引き受けたとはいえ、ちょうど小説の執筆中であったので、実は「不機嫌」であったという。この時、竹内は日記に「連日の奔走で疲労、しかし大に愉快なり」⁽³⁰⁾と記している。当時の気持ちについて、日中戦争中の1942年、竹内は、「あのころの僕らはまだ、日支文化の提携というようなことを、本気で信じ、それが出来ることと思っていた」⁽³¹⁾と回想している。1935年3月に発刊された会報『中国文学月報』1号の後記にも、「中国文学研究会は中国文学の研究と日支両国文化の交歓を目的とする研究団体」と記されているので、中国との文化的交流という理想は、確かに竹内の、中国文学研究会結成の初心であったとも言えるであろう。

8月4日午後六時、日比谷山水楼で周作人と徐祖正の歓迎会は開催された。『斯文』雑誌1934年9月号に掲載された記事「周作人・徐祖正両氏歓迎会」（無署名）によれば、当夜の出席者は、有島生馬、池田孝、岡崎俊夫、佐藤春夫、佐山荊、塩谷温、島崎藤村、曹欽源、竹田復、武田泰淳、竹内好、戸川秋骨、飛田角一郎、永持徳一、新居格、堀口大学、正宗得三郎、松枝茂夫、松川朴平、松井武男、宮田修、村松梢風、柳沢健、横地倫平、頼貴富など合計25人である。発起人の一人である与謝野は8月3日に妻と共に越後の赤倉へ旅行しており⁽³²⁾、当夜は出席しなかった。

会の模様は以下のように記されている。

周氏は徐氏の通訳にて中国語を用いて中国学芸界の状勢と自己の境地を闡明した。両氏に関係深き人々の集まりだけに、夜更くるまで歓談尽きず、学界と文壇の珍しい団楽振りに、主客共に頗る愉快そうに見えた⁽³³⁾。

また、歓迎会は、早くも開催二日前の8月2日、読売新聞朝刊に、「日中親善は文学から——魯迅の弟中心に歓迎会」と報じられていた。記事全文を見てみよう。

日支の友好関係を深めるには外務省のお役人の手ばかり借りているよりも同文同種の文化外交の手で行く方が近道だろうというわけで先ごろ来朝して目下本郷菊富士ホテルに滞在中の中国の文豪魯迅氏の弟で日本文学研究家として知られている周作人氏及び徐祖正氏の両氏を主賓に来る四日午後六時から日比谷山水楼でわが学界並に文壇人の歓迎会が催される。この美しい会合の発起人は与謝野寛、佐藤春夫、新居格、東大文学部助教授竹田復の諸氏で中国文学研究会の新人たちも出席して大いに文芸談を交え、歓談裡に素人外交の実を挙げようという計画である。

竹内の日記によれば、この記事は竹内の東大支那文学部の同期で、ジャーナリストの横地倫平によるものであった⁽³⁴⁾。横地は中国文学研究会の準備活動に参加していたが、すぐやめたようである⁽³⁵⁾。

「日中親善は文学から」という見出しと記事本文の内容から読み取れるのは、この歓迎会は「日支の友好関係を深める」ための「同文同種の文化外交」として捉えられ、「外務省のお役人の手」によってではなく、「素人外交」の実として期待されていた、ということである。横地個人の本心は分からないが、客観的に見れば、周作人訪日は当時の日中親善の文化交流として報道されたと言えるであろう。

歓迎会が日中親善をうたった時代背景については、1975年7月に竹内との対談で、武田泰淳が以下のように回想していることが一つの証左となるであろう。

それ〔中国人留学生が大勢来日して：引用者注〕から日本の政府側としては、ともかく日華親善ということは建前としてはやっているわけですよ。ところが親善といっても、どういう人間と親善していいかということとはわからないで、それで急につかまえたり、また釈放したり、歓迎したりする⁽³⁶⁾。

武田によれば、1934年に来日し、中国文学研究会と親交を結んだ中国の女流作家謝冰瑩は、特高警察に左翼の嫌疑で、彼と一緒に逮捕された。その際に目黒警察署で、武田は特高主任に「周作人は赤だろう」といわれた。武田は、「周作人は来たときだって、それが実際どういう人間だかということは〔官憲には：引用者注〕わからなかったでしょう」と回想している。

しかしながら、「付合うことそのものは、政府も奨励したというか、すぐに弾圧することは出来ない、内容がはっきりしなければ」、「やっぱり日華親善をやらなきゃならないから、すぐにわれわれを抹殺することはどんなことしてもできないわけだね」と、武田は述べている。それに対して、竹内も「われわれは日華親善という日本国家の建前を利用したわけなんだ。それである程度はうまくやれば泳げるという自信はあった」と述べている。

そのほか、竹内たちと付き合った中国人留学生杜宣は、『中国文学月報』1号に中国語の短文を投稿している。この短文は、中国の革命文学運動の現状を訴えるものであるが、竹内たちが「かなり激越なもの」で翻訳掲載すると危険だ、と判断したので、原文のまま掲載されたという⁽³⁷⁾。それは日本政府に当時の日本におけるプロレタリア文学運動弾圧を連想させる恐れがあったからだと思われる。また、日本に留学した経験を持つ中国の作家郁達夫は、1936年11月外務省文化事業部に招待されて来日し⁽³⁸⁾、中国文学研究会に歓迎された。東方文化事業の推進とい

う外務省の思惑に反して、郁達夫は12月2日に留学生に向けて反日講演を行ったので、三日後中国文学研究会の例会で行う予定だった「中国の旧詩」に関する講演は警察に禁止され、仕方なく竹内は郁の代役として自ら「中国文学研究の方法」と題された講演を行ったという⁽³⁹⁾。

同時代中国との本格的な文化的交流を目指して発足したばかりの中国文学研究会が、思想監視が強まる1930年代の日本の険しい政治的空気と文化統制の圧力の下で、周作人を含む中国の作家たちとの交流を継続するために、やむを得ず日中親善のスローガンを利用していたことが分かる。周作人歓迎会が文化外交として記録されたことから窺えるように、竹内らにとっては恐らく不本意な形ではあったものの、研究会の活動は日中親善という政治的建前のもとに展開されていたのであろう。

IV 宴会での話題：中国文壇における周作人及び日中文化合流の展望

前述の記事「周作人・徐祖正両氏歓迎会」には、歓迎会で周作人は「中国学芸界の状勢と自己の境地」を日本の知識人たちに説明したとある。そして、雑誌『斯文』同号の、歓迎会に出席した松井武男の論文「中国文壇と周作人」は、まさに文壇における周作人の立場を紹介したものである。また、やはり出席者の一人である外務省文化事業部課長の柳沢健も、歓迎会に関するエッセイを残した。この二人の文章を通して、歓迎会で周作人が日本の知識人と話し合った内容をある程度把握できる。

松井は中国文学研究会のメンバーであり、東京帝大支那文学科の塩谷温門下で当時陸軍士官学校の漢文教官を務め、学界の事情にも通じており、研究会の設立に進んで協力したということであるが、陸軍学校との関係のため、政治問題に敏感な一面もあり、既に紹介した「謝冰瑩事件」以後次第に研究会から遠ざかった⁽⁴⁰⁾。歓迎会のほか、松井は7月29日、31日、8月10日にも周作人を訪問しており、中国文壇について語り合い、周氏の主旨を把握していたと推測できる。

「中国文壇と周作人」で、松井はまず、五四新文化運動によって中国の知識青年は新思想を取り入れたが、自国の伝統を蔑視する態度から抜け出せなくなり、過激に反逆したと指摘する。次に、周作人による外国文学の翻訳・紹介、文学研究会の創設、雑誌『語絲』、『駱駝草』編集などの実績を挙げ、新文化運動における周作人の功績を認めた。

そして、松井は「現文壇と周作人の立場」という節で、以下のように紹介している。

上海中心の中国文壇を、はっきりと三潮流に分けて眺めねばならなくなった。

(一) 辨証法的唯物論に抛り、一切の芸術は都て宣伝なりと称して階級闘争の前駆を以て任じ、革命文学を提唱する左翼は、強烈な弾圧下に精鋭を集めて、作家連盟の頭領として魯迅を担っている。〔中略〕

(二) 国民党の御用文学たる民族主義文芸作家は、反帝的激昂と、ファシズムの思潮とに乗っているけれども、作品の芸術性に乏しい憾がある。〔中略〕

(三) 左右両派に超然たる態度或は半推半就の態度を取る所謂第三種人なる作家群が散在する。この人人は左右両派から挟撃せられ、お互同志の抗争もするが、生命と生活の安全地帯に在って、純粹の学芸にたずさわる自由を有する。周作人は勿論この第三種人の中に入れられる。

その詳細について、松井は以下のように続けている。

氏は現在上海中心の文壇の浮躁凌厲に慊らず、左右両派の文学運動に超然として、独立の立場に在り、あまり意見を吐かない。一九三二年に試みた、輔仁大学での講演筆記が、同年九月に『中国新文学の潮流』と題して出版された。これは五四文学運動の批判と反省である⁽⁴¹⁾。

最後に、松井は許傑という「左派」の作家⁽⁴²⁾が書いた周作人批判の概要を紹介し、「論者の立場には私は反対である」と述べたが、その理由は書かなかった。

日本滞在中、周作人自身はエッセイ「日本に来たりて」で、中国の現代文壇は大抵日本と同様、「矢張り左派、右派、その中に立っている中立派もある」と指摘し、左翼の作家について「果たして、立派なプロ文学になって居るかどうか知らぬ」と述べている⁽⁴³⁾。その分け方は上記の松井の文と一致しており、松井が周作人との交流を通して得た見解である可能性が高いと考えられる。

また、井上紅梅との対談では、周作人も「何しろ左派の口に逢っては敵いません。日本では明治大正を経ていろんな外国文学が消化されましたが、支那のは一足飛びにプロ文学に向っている。何に依らず革命と云うことが彼等の心を引いているのです」⁽⁴⁴⁾と苦言を呈している。

翌年4月にも、松井は森川勢南という筆名を用い、エッセイ「新旧問答」を発表し、周作人の言葉を以下のように引用している。

「民衆政治の美名の下に、資産階級専政が強化され、革命文学の口號を掲げて、無聊文士の応制が行われる。」と。

皮肉屋さん周作人先生の舌上に龍泉あり⁽⁴⁵⁾。

周作人との交流を通して松井が受け取った「中国学芸界の状勢」と周作人の「境地」は、以上の通りである。周作人本人は自分が左右両派に対して超然と「独立の立場」にいるとは明言しなかったが、訪日直前の「五十自寿詩」事件と以上の発言と合わせて見れば、彼の政治、革命から距離を置く態度が窺える。後に述べるように、歓迎会に出席した中国文学研究会の他のメンバーも、周作人の政治から退く隠然とした一面に言及している。

一方、外務省官僚の柳沢は歓迎会で日中文化合流の展望を述べた。周作人の訪日は政治性を含まぬ私的な訪問であるにもかかわらず、この柳沢の発言からは、これに対する日本政府の政治的な意図が窺える。

柳沢のエッセイ「周・徐両先生を迎えて」によれば、歓迎会で周作人は、今回日本に来て大阪寿司を見て初めて、これが今の中国には既に亡びて、六朝時代の文献に「魚と御飯とに酔の味をつけ、それを重石で押して後これを食べる」と記載される食べ物であることが分かったという話をしたようである。これに関して、柳沢は周作人への挨拶の中で、以下のように述べている。

中国の事物と日本の事物と、全く其の根源を一にすると云うものは極めて多い訳で、これを見ても中国での文化と日本の文化とは、実に親子でもあり、兄弟でもあると云うことが今更に判るのである。従って単純に吾々が東洋文明、若しくは東方文化と云うが其の真髄は外ならぬこの中国の文化と日本の文化とが合流せるもの乃至は包容せるものであると云うことが出来よう⁽⁴⁶⁾。

続けて、柳沢は出席者に向け、「両先生〔周、徐両氏：引用者注〕に倣って我々も一層両者間〔日中両国：引用者注〕の連絡を密にするに努め、広く世界人類の文化の進歩のために協力せねばならぬことを痛感する次第である」という希望を述べた。

柳沢の発言は一見文化一般をめぐるものようであるが、東方文化事業を運営する外務省の官僚からの発言は、同事業の推進と関係がないとは決して言えないであろう。日中両国の「同文同種」の関係を強調し、両国文化の合流を望むという考え方も、この3年後の日中戦争勃発後には、近衛文麿内閣が目指した東亜新秩序、いわば日本・満洲国・中国という東亜協同体建設の文化的根拠とされた。1938年11月の「東亜新秩序声明」に応じて、近衛の私的政策研究集団であった昭和研究会の、三木清、高田保馬などの学者たちは一連の東亜協同体論を発表し、日中文化伝統を基礎とした「東洋文化の統一」や、「同種、同文、同域」という「社会文化的近接性」を基にした「超民族」の形成を主張した⁽⁴⁷⁾。その後1941年9月24日の詔

売新聞朝刊に掲載された評論「大東亜共栄圏の理念」（無署名）は、「同文同種」、「唇齒補車」という日中両国の「宿命的関係」と「和衷協同」の重要性を主張しながら、「日本の好意を斥ける」中国の態度を批判している。

柳沢はエッセイの最後に、以下のように述べている。

現に中国の識者中、日本文明の研究を欧米文明の研究に比して更に緊要であると云う声も近来頗る高いやに聞いて居るが、斯る識者が一層増すことは吾々としても希望に堪えないし、又日本としても斯る要求に対しては極力協力を惜しむものではないことは云うまでもあるまい。この意味で周・徐両先生の如きは恰もこの要求にピッタリと当てはまる方であり、中国として真に大切な人と思わると共に、今後両先生の活動が益々活発となることを望むと共に、両先生の如き識者が中国の上下に益々増加されむことを心から希望して止まない次第である⁽⁴⁸⁾。

ここで柳沢は再び周作人と徐祖正に、日中文化提携に協力してもらおうという意図を述べている。政治から距離を置く態度を持ち、個人として訪日したとはいえ、周作人は日本から注目され、さらに日中両国の文化の合流に協力する「識者」として柳沢に期待されたのであった。

V 研究会メンバーの周作人研究と歓迎会への回想

1934年周作人の訪日を機に、日本の知識人たちは周作人に関心を寄せ、「周作人を本格的な研究対象とした論考をはじめて産み出した」⁽⁴⁹⁾という。訪日の直後、周作人の業績、政治・文学への態度をめぐって、中国文学研究会メンバーたちは研究を行い、それぞれの見解を述べている。

『中国文学月報』1号には、早くも周作人に言及した複数の論文が掲載されている。竹内好は「今日の中国文学の問題」で、同時代の中国文壇における小品文の盛行について、それは「中国特有のディレッタンティズムが再び擡頭したもの」だと評し、またその原因は「周作人の如きは未だに文壇的に一方の支配力を有っている」ことにあると指摘した⁽⁵⁰⁾。

岡崎俊夫は「袁中郎研究の流行」⁽⁵¹⁾で、周作人の著書『中国新文学の源流』（人文書店、1932）に言及し、白話文学運動の主張は西洋から借用したものであるが、その精神は既に中国の明末公安派の主張に存在していたという周作人の見解を紹介した。

松枝茂夫は1935年の論文「周作人先生の立場」で、周作人の思想における、封建社会と闘争する「叛徒」と「思想消沈せる」「隠士」という二つの要素の「起伏」を指摘し、周作人の「澄みきった眼で静かに物を見ようとする隠士的態度」もまた「立派な生き方」だと評価した。松枝はまた、今日「隠士に転落したかに見える」周作人の「心の奥深く、もう一人の同居者が潜んでいないと誰が保証し得るものぞ」⁽⁵²⁾と述べており、やはり彼は周作人の「叛徒」の一面はまだ存在していると信じていたであろう。この後の1936年から、松枝は周作人へ私信を送り、周の随筆を翻訳する際に生じた問題について教えを請うた。これから周作人と三十余年にわたって書簡で交流し、周作人作品の翻訳、紹介を精力的に行った。

さらに、『中国文学月報』6号と7号は「現代小品文特輯」として発行され、そこに実藤恵秀が訳した周作人の「蠅」⁽⁵³⁾という、蠅に関する神話や詩文を紹介するエッセイが掲載された。この頃、なぜ小品文が特に注目されたのか。竹内は1936年に書いた「最近の中国文学」で、ソヴィエトから影響を受け、革命文学の嵐によって根こそぎ奪われた中国文学の「個人主義的精神」は、ユーモアや個性を唱える小品文派によって保存された⁽⁵⁴⁾と述べている。また竹内は「現代中国文学の特質」で、周作人と小品文派は「今日何ら民族主義と関わりない」が、中国文学は革命文学派と小品文派の対立という形でソヴィエト化から「自己の均衡を保った」ので、「小品文の存在自体は最も純粋に民族的なものである」と評している⁽⁵⁵⁾。また竹内は『「現代小品文特輯」解説』で、『蠅』は必ずしも周作人の代表的なものではなく、周氏の作品が社会諷刺にも亦富むことに注意したい、とも述べている⁽⁵⁶⁾ので、やはり竹内も松枝と同様、政治から隠退した

ように見える周作人に潜む「闘争的な」一面にも気づいていたであろう。

そのほか、増田渉は論文「周作人論」で、乱世において周作人と小品文派の取った「平淡自然」の態度に不満を感じ、「君等は清適な把戯はいい加減にしてみっと文学の真面目に帰れ、則ち君等は先ずリアリズムに立戻るべきだ」⁽⁵⁷⁾と批判している。

以上を踏まえると、周作人の訪日を機に、中国文学研究会のメンバーは、現代中国文学の発展に対する周作人の貢献を紹介し、それぞれの翻訳、研究を通して、白話文学運動と伝統文学との関連についての認識を深め、1930年代の中国文壇の現状、特に小品文への関心を持ち始め、また周作人の隠遁的な文学者の一面におおむね理解を示したことが分かる。政治のために利用された日中親善のスローガンに比べると、彼らの努力のほうが、確実に中国理解と日中文化交流に貢献したとも言えるであろう。

1937年盧溝橋事件勃発後、北京大学は長沙へ移転したが、周作人は日本軍支配下の北京に留まった。その後周作人の行った「対日協力」の経緯は木山英雄の研究⁽⁵⁸⁾で考察されている。木山は、当時の周作人が「家族の係累」に縛られており、また南下による左派からの攻撃を恐れ、さらに「事変の早期局部解決」という誤算によって北京残留を決意した、と指摘している。1939年1月、周作人は、「抗日鋤奸団」が画策したと思われる⁽⁵⁹⁾狙撃事件にショックを受け、8月日本軍支配下の北京大学図書館館長及び文学院院長に就任した。とはいえ、木山によれば、大家族を抱える周作人の経済的問題や、「留平教授」として北大の資産を保管する使命のため、周作人は狙撃事件より先に文学院長に出馬することを考えており、事件は彼に「出馬しても精神的にもちこたえるだけの自信」をもたらした契機にすぎない、と推測している。1941年1月、周作人は華北政務委員会の教育総署督弁に就任し、彼の「対日協力」は決定的となった。日本人の妻の影響などの理由のほかにも、木山は、「反政治主義の体質の」周作人が、結局「一種の政治的考慮」に動かされ、敵を前にして「風に当たってなびいてしまった」ような「妥協」をしたと論じている。教育督弁に就任後、周作人は公の場で「東洋民族共通の運命」、「日華文化の提携」を唱えたが、木山はその「表面的」な発言から、日本の対米英戦争を「せめて淪陥区の主権回復の契機にしたい」という周作人の「政治的念願」を読み取ろうとしている。1945年日中戦争が終わり周作人は12月に対日協力者の一人として逮捕され、「漢奸」の罪名で投獄された。

このような政治から逃れられなかった周作人の運命を、同時代の文学創作者であり、また中国現代文学に切実な興味を抱く文学研究者として見届けてきた中国文学研究会のメンバーの武田泰淳は、戦後当時の歓迎会の状況を振り返っている。

1951年、武田はエッセイ「しびれた触手——日本の外国文学者について」で、外国文学研究者の立場について論じた。そこで、武田は17年前の周作人歓迎会に関する重要な回想を残している。武田によれば、当時、日本学界、文壇の名士たちが集まり、武田は「受付で、客から会費を受領する役目」を務めたという。席上、島崎藤村の周作人への歓迎の辞は、武田の印象に深く残った。武田は以下のように記している。

やがて指名された藤村は立ち上って、遠来の客を迎える辞をのべた。彼は遠くではよく聴きとれぬほど低い声で、つぶやくように言った。「何も申し上げることはない。ただ先生は旅の宿の窓から、日本の雨の音を静かに聴き取って、お帰り願いたい」⁽⁶⁰⁾。

また、武田は別のエッセイ「静かな計画性」の中でも、当時島崎の言葉をこのように記している。

「周先生は日本国内のやかましい雑音に耳かたむけられることなく、ただ、旅の宿の窓を打つ日本の雨の音をしずかにききとられて、お帰りになって下さい」⁽⁶¹⁾。

既に紹介した通り、周作人は当時日本社会で「親日家」として歓迎され、この歓迎会も日中親善のための文化外交だと記事に書かれた。島崎の言う「やかましい雑音」とは、以上のこと

を指していると想像できるであろう。

「しびれた触手」で、武田は以下のように続けている。

彼〔島崎：引用者注〕は自分自身はその暗い雨を聞き入るように、古武士の如き礼儀正しく、それだけ語って着席した。彼は『夜明け前』を完成した直後である。しかし自己と自己の愛する祖国の上に新しい夜が五月雨のように舞い降りているのを感じ取っていたにちがいない⁽⁶²⁾。

『夜明け前』は、周知の通り明治維新前後の動乱期にあった信州木曾谷の人々を描いた島崎晩年の長編小説である。やがて日本が戦乱という「新しい夜」を迎えることを鋭く予感した島崎は、周作人に対して、「やかましい雑音」に耳を傾けないでくださいと告げた、と武田は歓迎会の状況を振り返り、自身の考えを以下のように述べている。

慎重な藤村は周の立場のむずかしさ、それと向き合った自分の姿勢のむずかしさをよく意識して、多少詩的な、できるだけ省略した、非政治的なるが故に政治的な語句を選んだのであろう。周は藤村が彼を理解する以上に、藤村を理解していたし、当時の日本の研究者が中国文学に打ち込む以上に、日本文学に打ち込んでいた。だがその夜の周は、中国語の挨拶をひかえ目に喋っただけで、心中の苦悩と情愛を一点も示さなかった。私自身は、人々の首と肩、卓上の生花の陰に隠れた周の、卵がたの、口髭を生やした、東方哲人的に無表情な顔を、認め得たにすぎぬ⁽⁶³⁾。

さらに、武田はこの歓迎会に対する反省の念を、以下のように述べている。

周作人が後に漢奸として投獄される運命が、私たちの宴会によって既に用意され始めていたのかもしれない。そしてたまたま中国文学の研究者となったが故に、彼の犯した国際犯罪に対して、人ごとならぬ肌寒さを感じ、共犯者じみた緊張を覚えねばならぬ、こちらの運命も、同時に抜かりなく用意されていたと称すべきかも知れぬ⁽⁶⁴⁾。

1934年の歓迎会で、まだ若かった武田は、周作人の沈黙を「東方哲人的に無表情な顔」として認識したにすぎず、周の立場の難しさを充分に理解していなかったようである。しかし、日中戦争勃発後、武田は兵士として戦場へ派遣され、また1944年に中日文化協会の一員として上海で勤務し、そこで敗戦を迎えた。こうして戦争に翻弄されてきた武田であったからこそ、島崎の言葉と周作人の立場を理解できるようになったのであろう。

最後に、武田は外国文学研究者の「民族の触手」のような役割について、以下のように記した。

外国文学研究者の立場は、彼自身が自覚している以上に、微妙である。彼はいかにのりりくらしとしても、民族の触手である。時によっては、痛ましく慄えねばならぬ、神経である。彼は伝統の断崖に立って、異国の砂漠の熱風にさらされなければならぬ。〔中略〕彼はもつとも民族的な肉体の一部として、民族の外界に裸のまま投げ出されているはずである。〔中略〕その日の料理を注文した受付係りは、何とか自己結着をつけねば、次の招待者を選ぶことが不可能である。選ぶとは、あれこれと器用に持ちこぶことではなく、向う側の色に染まってしまった手を、洗い落とせなくなっている自分に驚き、その手をぶら下げたまま、あらためて生き続けることである。その色がまた、理解吸収の緑色より、摩擦反撥の赤色、そして罪の黒色であることが多い⁽⁶⁵⁾。

武田泰淳は歓迎会での出来事と周作人のその後の運命に、「共犯者じみた緊張」を覚え、外国文学研究者の「民族の触手」のような役割の難しさを感じ取っている。異国文化を理解する

事業の第一線に立つ外国文学研究者は、敏感な「触手」のように、一番早く相手からの刺激を感じて、両国の政治的摩擦による痛みを受けることになる。彼らは相互の理解を促進するという理想を抱いているが、現実の中で誤解されたり、傷ついたり、ないし罪を蒙ったりする危険を免れない。武田は「民族の触手」という文学的な言葉で、このような悲しみを表した。戦争中軍隊に招集され、中国への侵略者となった武田、竹内にせよ、戦後「漢奸」となった周作人にせよ、「民族の触手」の運命から逃れられないのだ。周作人に対する日本社会の注目、日中親善の建前の中で開催された歓迎会は、その運命のプロローグのように、後に彼らが政治の渦に引きずり込まれることを暗示していたと考えられる。

VI おわりに

本稿は、1934年周作人の訪日に対する日本社会の注目、中国文学研究会が主催した歓迎会と当時の日中親善の国策との関係、及びこの歓迎会が研究会メンバーたちにもたらした影響について考察した。

個人として来日したとはいえ、日中の親善関係を促進するという日本政府の国策を背景として、周作人は日本国内の注目を浴び、公式な応接を受け、また「親日家」として歓迎された。この時期に、周作人に対する日本社会の歓迎には、既に政治的な意図が存在していたとも言える。

このような時代の中で、中国文学研究会は中国との本格的な文化的交流という初心を持って発足したのだが、この歓迎会は新聞に日中親善の文化外交の成果として報道された。竹内好らと同時代の中国知識人たちとの交流は、政府からの文化統制の圧力を受けたため、彼らはやむを得ず日中親善という政治的建前を利用し、その下に活動を展開していた。

また、歓迎会の詳細に関して、周作人と日本の知識人は、宴会で中国文壇とそこにおける周の位置をめぐって交流したようである。研究会のメンバーの松井武男によれば、周作人は政治から離れて純粋な学問にたずさわる「独立の立場」にいるという。にもかかわらず、席上で外務省官僚の柳沢健は周作人に、日中文化合流のために協力しようという期待を述べていた。そこから、政治から隠退しようとした周作人に対する日本政府の政治的意図が窺える。

この歓迎会を機に、研究会の他のメンバーたちもそれぞれの研究を始め、周作人の隠遁的な態度を感じ取り、また中国文壇への認識を深めた。日中親善は政治のために唱えられる時代の中でも、周作人を道標として中国文学を理解しようとする彼らの地道な研究は、日中文化交流の初心を実践していた。しかし、やがて周作人が「偽職」に就任し、戦後に「漢奸」として投獄された運命を見届けた武田泰淳は、17年後この歓迎会の様子を振り返り、「共犯者じみた緊張」を覚え、その後の周作人と研究会メンバーたちが戦争に翻弄される運命は、この歓迎会から既に用意され始めたと考えていた。日中戦争の時代の中で、どんなに相手の国の文化に憧れ、純粋な文化的交流と理解に努めようとも、到底政治から逃れられず、親善という建前による痛みと罪を背負っていたというのは、周作人と武田たちのような外国文学研究者の、共通な悲哀とも言えるであろう。

注

- (1) 立間祥介 1971「中国文学研究会年譜」『復刻中国文学(別冊)』汲古書院、36頁。
- (2) 伊藤徳也 1993「日本における周作人研究」『中国 社会と文化』8、277頁。
- (3) 同注1、39頁。
- (4) 飯倉照平 1972「竹内好と武田泰淳」『朝日ジャーナル』14(49)、36-43頁。渡邊一民 2008「戦時下10年の中国と日本(上)―中国文学研究会をめぐって」『思想』1010、6-34頁。熊文莉 2017『日本「中国文学研究会」研究』社会科学文献出版社など。
- (5) 伊藤徳也 2021「1934年の中国文学研究会主催周作人歓迎会の実態について」『周作人研究通信』12、57-61頁。
- (6) 辛島驍 1934「周作人氏と現代支那」『朝鮮及満州』322、28-30頁。

- (7) 松井武男 1934「中国文壇と周作人」『斯文』16 (9)、34-46頁。
- (8) 劉岸偉 2011『周作人伝—ある知日派文人の精神史』ミネルヴァ書房、212-218頁。
- (9) 徐曉紅 2019「1934年周作人訪日考釈—以与同仁会的往来為線索」『現代伝記研究』2月号、229頁。原文は「向来日的周作人示好，既可博得他对同仁会的好感，同時也是試図将他納入日中親善同盟的一種举措。」
- (10) 打油詩：ざれ歌。
- (11) 同注8、218頁。
- (12) 周作人 1996『影印本周作人日記（下）』大象出版社、646-648頁。
- (13) 張菊香・張鉄林 2000『周作人年譜』天津人民出版社、448頁。
- (14) 周作人 1937「日本管窺之四」『国聞週報』14 (25)。引用は周作人 2009「日本管窺之四」『周作人散文全集（第7巻）』広西師範大学出版社、731頁。原文は「大前年夏天我往東京去玩。」
- (15) 周作人 1943「島村藤村先生」『芸文雜誌』1 (4)。引用は周作人 2009「島村藤村先生」『周作人散文全集（第8巻）』広西師範大学出版社、794頁。原文は「利用暑假，同人人到東京去住了兩個月，徐耀晨先生也在那里。」
- (16) 同注1、39頁。
- (17) 井上紅梅 1934「周作人に聞く」『文藝』2 (9)、32頁。
- (18) 同注12、647頁。
- (19) 1923年、日本政府は中国の教育界に対する欧米諸国の接近に危機感を覚え、教育・文化的アプローチによって日中両国民の相互理解を深め、日本の中国進出を円滑に進めるという外交政策的配慮から「対支文化事業特別会計法」を制定した。この事業は1925年から日中両国の共同事業へ発展し、「東方文化事業」と改称されたが、中国側から「文化侵略」という批判の声もあった。1929年からは再び日本側の単独事業に移行する。阿部洋 1978「『対支文化事業』の成立過程」『日本の教育史学』21、38-53頁を参照した。
- (20) 大里浩秋 2005「『日華学報』目次」『人文学研究所報』38、2頁。
- (21) 「昭和九年度第十八回年報」アジア歴史資料センター
(<https://www.jacar.archives.go.jp/das/image/B05015266000>、最終アクセス：2022.8.8.)
- (22) 白井勝美 1998『日中外交史研究—昭和前期』吉川弘文館、172頁。
- (23) 焦潤明・焦捷 2017「九一八事変后中国朝野对“中日親善”言論的反應」『史学月刊』9月号、95-104頁を参照した。
- (24) 時代背景について、主に1933年から1934年までの読売新聞の記事を参照した。
- (25) 周作人 1920「親日派」『晨報』10月23日号。引用は周作人 2002「親日派」『周作人自編文集—談虎集』河北教育出版社、16頁。原文は「中国的親日派，同儒教徒一樣，一樣的為世話病，却也一樣的并没有真实的当得起這名称的人。中国所痛惡的，日本所歡迎的那種親日派，并不是真正的親日派，不過是一種牟利求榮的小人，對於中国，与對於日本，一樣是有害的。」なお既訳には、訳者不明 1936「親日派というもの」『新天地』16 (9)、92頁があり、参照した。
- (26) 同注25。原文は「我們承認一国的光荣在於他的文化—學術与芸文，并不在他的屬地利權或武力。〔中略〕中国不曾有真的親日派，因為中国還沒有人理解日本国民的真的光荣。」
- (27) 韓立冬 2013「戦前日本の中国人留学生予備教育—特設予科とその周辺」東京大学博士論文を参照した。
- (28) 周作人 1926「“親日派”的説明」、『語絲』93。引用は周作人 1998「“親日派”的説明」『周作人文類編—日本管窺』湖南文芸出版社、619頁。原文は「親日派，這個名詞何等的好，我輩怎么仰攀得着？」
- (29) 後文に出現する「日支親善」、「日華親善」などの表記も存在しているが、本文はとりあえずそれらと同じと見なし、歓迎会に直接に関わる横地倫平の記事に見られる「日中親善」を採用する。

- (30) 竹内好 1972「中国文学研究会結成のころ」『辺境』9。引用は竹内好 1981「中国文学研究会結成のころ」『竹内好全集(第15巻)』筑摩書房、69頁。
- (31) 竹内好 1942「佐藤春夫先生と北京」『文学通信』8。引用は竹内好 1981「佐藤春夫先生と北京」『竹内好全集(第14巻)』筑摩書房、287頁。
- (32) 与謝野寛 1934「消息」『冬柏』5(9)、854頁。
- (33) 無署名 1934「周作人・徐祖正両氏歓迎会」『斯文』16(9)、71頁。
- (34) 同注30、69頁。
- (35) 竹内好ほか 1968「戦後文学の批判と確認—その仕事と人間・武田泰淳」荒正人(編)『近代文学の軌跡・統一戦後文学の批判と確認』豊島書房、17頁。
- (36) 竹内好・武田泰淳 1975「『中国文学』のころ—時代、人びと、そして私」『文芸展望』10。引用は竹内好・武田泰淳 1979「『中国文学』のころ—時代、人びと、そして私」『武田泰淳全集(別巻2)』筑摩書房、242-243頁。
- (37) 1979「月明、笛と風がきこえる」『武田泰淳全集(第18巻)』筑摩書房、219頁。
- (38) 郁達夫の来日の詳細については、武継平 2010「1936年郁達夫訪日史実新考」『中国文化研究』2月号、187-195頁が論じている。
- (39) 竹内好 1969「中国と私」『未来』29。引用は竹内好 1981「中国と私」『竹内好全集(第13巻)』筑摩書房、215頁。
- (40) 同注1、35-45頁。
- (41) 同注7、37-38頁。周作人の著書は『中国新文学の源流』である。
- (42) 許傑(1901-1993)、原名世傑、浙江省生まれ。1926年に文学研究会に参加し、翌年中国共産党に入党し、革命文学を提唱した。松井には「左派」と書いたが、正式には左連に参加しなかったという。蒋荷貞 1994「許傑生年表(上、下)」『杭州師範大学学報社会科学版』1、2月号、38-45、17-23頁を参照した。許傑の「周作人論」は1934年7月号の『文学』に掲載された。
- (43) 周作人 1934「日本に来たりて」『中央公論』49(10)、155頁。
- (44) 同注17、34頁。
- (45) 森川勢南 1935「新旧問答」『中国文学月報』2、22頁。
- (46) 柳沢健 1934「周・徐両先生を迎えて」『支那』25(9)、52-53頁。
- (47) 嵯峨隆 2016『アジア主義と近代日中の思想的交錯』慶應義塾大学出版会を参照した。
- (48) 同注46、54頁。
- (49) 同注2、278頁。
- (50) 竹内好 1935「今日の中国文学の問題」『中国文学月報』1、2頁。
- (51) 岡崎俊夫 1935「袁中郎研究の流行」『中国文学月報』1、6頁。
- (52) 松枝茂夫 1935「周作人先生の立場」『支那語学報』1。引用は松枝茂夫 1999「周作人先生の立場」『松枝茂夫文集(第2巻)』研文出版、9頁。
- (53) 周作人 1935(1924『晨报副刊』7月13日号)「蠅」(周作人、「蠅」、実藤恵秀訳)『中国文学月報』6、69頁。
- (54) 竹内好 1936「最近の中国文学」『文芸』4(12)。引用は竹内好 1981「最近の中国文学」『竹内好全集(第14巻)』筑摩書房、51頁。
- (55) 竹内好 1937「現代中国文学の特質」『支那』28(4)。引用は竹内好 1981「現代中国文学の特質」『竹内好全集(第14巻)』筑摩書房、92頁。
- (56) 竹内好 1935「『現代小品文特輯』解説」『中国文学月報』6、71頁。
- (57) 増田渉 1935「周作人論」『中国文学月報』9、98頁。
- (58) 木山英雄 2004『周作人「対日協力」の顛末—補注『北京苦住庵記』ならびに後日編』岩波書店を参照した。
- (59) 木山は前掲の著書418-421頁で、范旭という燕京大学の卒業生の回想を「実にストレートな証言」として採用している。范によれば、「日華事変」勃発後、天津の中学生の間に「抗日鋤奸団」という組織が作られた。1938年、「北京の燕大に入学した団員の范旭と宋顕勇

の二人には教育督弁出馬を噂されていた周作人に『死刑を執行』するための準備が指令され、周家周辺の調査と拳銃調達を済ませた結果を宋が報告しに行ったその日のうちに天津から幹部格の李如鵬と趙爾仁が乗り込んできて、当日は范がこの両名を手引きする形で実行に及んだという」と、木山は紹介している。

- (60) 武田泰淳 1951「しびれた触手—日本の外国文学者について」『群像』6(6)。引用は武田泰淳 1977「しびれた触手—日本の外国文学者について」『身心快樂—自伝』創樹社、75頁。
- (61) この小文は最初は島崎藤村 1966『藤村全集』筑摩書房の内容見本に掲載された。引用は武田泰淳 1977「静かな計画性」『身心快樂—自伝』創樹社、106頁。
- (62) 同注60、75頁。
- (63) 同注60、75頁。
- (64) 同注60、75頁。
- (65) 同注60、75-76頁。

引用・参考文献

和文文献

- 阿部洋 1978「『対支文化事業』の成立過程」『日本の教育史学』21、38-53頁。
- 飯倉照平 1972「竹内好と武田泰淳」『朝日ジャーナル』14(49)、36-43頁。
- 伊藤徳也 1993「日本における周作人研究」『中国 社会と文化』8、277-285頁。
- 2021「1934年の中国文学研究会主催周作人歓迎会の実態について」『周作人研究通信』12、57-61頁。
- 井上紅梅 1934「周作人に聞く」『文藝』2(9)、32-34頁。
- 白井勝美 1998『日中外交史研究—昭和前期』吉川弘文館。
- 大里浩秋 2005「『日華学報』目次」『人文学研究所報』38、1-78頁。
- 岡崎俊夫 1935「袁中郎研究の流行」『中国文学月報』1、6頁。
- 辛島驍 1934「周作人氏と現代支那」『朝鮮及満州』322、28-30頁。
- 韓立冬 2013「戦前日本の中国人留学生予備教育—特設予科とその周辺」東京大学博士論文。
- 木山英雄 2004『周作人「対日協力」の顛末—補注』北京苦住庵記』ならびに後日編』岩波書店。
- 嵯峨隆 2016『アジア主義と近代日中の思想的交錯』慶應義塾大学出版会。
- 周作人 1934「日本に来たりて」『中央公論』49(10)、153-159頁。
- 1935(1924『晨報副刊』7月13日号)「蠅」(周作人、「蠅」、実藤恵秀訳)『中国文学月報』6、69頁。
- 1936(1920『晨報』10月23日号)「親日派というもの」(周作人、「親日派」、訳者不明)『新天地』16(9)、92頁
- 竹内好 1935「今日の中国文学の問題」『中国文学月報』1、1-5頁。
- 1935「『現代小品文特輯』解説」『中国文学月報』6、70-71頁。
- 1936「最近の中国文学」『文芸』4(12)。引用は1981『竹内好全集(第14巻)』筑摩書房、51頁。
- 1937「現代中国文学の特質」『支那』28(4)。引用は『竹内好全集(第14巻)』、92頁。
- 1942「佐藤春夫先生と北京」『文学通信』8。引用は『竹内好全集(第14巻)』、287頁。
- 1969「中国と私」『未来』29。引用は1981『竹内好全集(第13巻)』筑摩書房、215頁。
- 1972「中国文学研究会結成のころ」『辺境』9。引用は1981『竹内好全集(第15巻)』筑摩書房、69頁。
- 竹内好・武田泰淳 1975「『中国文学』のころ—時代、人びと、そして私」『文芸展望』10。

- 引用は1979『武田泰淳全集(別巻2)』筑摩書房、242-243頁。
竹内好ほか 1968「戦後文学の批判と確認—その仕事と人間・武田泰淳」荒正人(編)『近代文学の軌跡・統一戦後文学の批判と確認』豊島書房、11-58頁。
武田泰淳 1951「しびれた触手—日本の外国文学者について」『群像』6(6)。引用は1977『身心快樂—自伝』創樹社、75頁。
— 1975「月明、笛と風がきこえる」『文芸展望』9。引用は1979『武田泰淳全集(第18巻)』筑摩書房、219頁。
立間祥介 1971「中国文学研究会年譜」『復刻中国文学(別冊)』汲古書院。
増田渉 1935「周作人論」『中国文学月報』9、97-98頁。
松井武男 1934「中国文壇と周作人」『斯文』16(9)、34-46頁。
松枝茂夫 1935「周作人先生の立場」『支那語学報』1。引用は1999『松枝茂夫文集(第2巻)』研文出版、3-10頁。
無署名 1934「周作人・徐祖正両氏歓迎会」『斯文』16(9)、71頁。
森川勢南 1935「新旧問答」『中国文学月報』2、21-22頁。
柳沢健 1934「周・徐両先生を迎えて」『支那』25(9)、50-54頁。
与謝野寛 1934「消息」『冬柏』5(9)、854頁。
劉岸偉 2011『周作人伝—ある知日派文人の精神史』ミネルヴァ書房。
渡邊一民 2008「戦時下10年の中国と日本(上)—中国文学研究会をめぐって」『思想』1010、6-34頁。

中文文献

- 蔣荷貞 1994「許傑生平年表(上、下)」『杭州師範大学学报社会科学版』1、2月号、38-45、17-23頁。
焦潤明・焦婕 2017「九一八事変后中国朝野对“中日親善”言論的反應」『史学月刊』9月号、95-104頁。
武継平 2010「1936年郁達夫訪日史実新考」『中国文化研究』2月号、187-195頁。
熊文莉 2017『日本「中国文学研究会」研究』社会科学文献出版社。
徐曉紅 2019「1934年周作人訪日考釈—以与同仁会的往来為線索」『現代伝記研究』2月号、223-234頁。
張菊香・張鉄林 2000『周作人年譜』天津人民出版社。
周作人 1920「親日派」『晨報』10月23日号。引用は2002『周作人自編文集—談虎集』河北教育出版社、16頁。
— 1926「“親日派”的説明」、『語絲』93。引用は1998『周作人文類編—日本管窺』湖南文芸出版社、619頁。
— 1937「日本管窺之四」『国聞周報』14(25)。引用は2009『周作人散文全集(第7巻)』広西師範大学出版社、731頁。
— 1943「島村藤村先生」『芸文雑誌』1(4)。引用は2009『周作人散文全集(第8巻)』広西師範大学出版社、794頁。
— 1996『影印本周作人日記(下)』大象出版社。

ウェブサイト

- 「昭和九年度第十八回年報」アジア歴史資料センター
(<https://www.jacar.archives.go.jp/das/image/B05015266000>、最終アクセス：2022.8.8.)